

# 西宮渡辺病院 管理者あいさつ

## 還暦を越え 次なる世紀へ

昨年2025年11月、西宮渡辺病院は創立60周年という大きな節目を迎えることができました。ひとえに、地域の皆様ならびに関係各位の温かいご支援とご厚情の賜物と、心より感謝申し上げます。

私は1983年より西宮渡辺病院整形外科の非常勤医として勤務を開始し、1988年に整形外科部長として赴任いたしました。以来、約40年にわたり、整形外科医として、また副院長、院長を経て、現在は管理者として本法人の歩みと共に過ごしてまいりました。西宮渡辺病院が医療法人から特別医療法人、社会医療法人へと発展を遂げる過程において、私自身も多くの経験を積み、法人と共に成長することができました。

強く印象に残っている出来事の一つが、1987年5月3日の憲法記念日のことです。当時、渡邊高院長からの連絡を受け、銃撃された朝日新聞阪神支局の犬飼兵衛記者の治療にあたりました。私にとっても初めての銃創への対応であり、当院が地域において救急医療を担うことの重責を強く認識した瞬間でした。

赴任後は整形外科専門医として、骨盤骨折をはじめとする整形外科治療、人工関節手術、スポーツ外傷、関節リウマチ治療などに携わってまいりました。長年この地域で医療を続けておりますと、かつて治療した患者さんやご家族、さらには当時小さかったお子さんが成長し、現在は当院のスタッフとして共に働いている姿に接することがあります。非常に感慨深く、この地で歩んできた月日の重みを感じます。

1995年1月17日の阪神・淡路大震災も、忘れられないつらい経験です。家族の安全を妻に託して病院へ向かいましたが、幸いにも建物被害は軽微で機能を維持することができました。十分な物資や人員がない中で対応でしたが、若い看護師たちの献身的な行動、震災直後から寄せられた皆様からの支えによって、地域医療を守り抜くことができました。

その後、2006年には西宮渡辺心臓脳・血管センターを開設し、現在では地域医療の要として重要な役割を果たしています。2020年の新型コロナウイルス感染症流行時には、現場で奮闘する職員たちの言葉に背中を押され、全院一丸となってこの事態に立ち向かいました。その際、創設者である渡邊高先生の「義を見てせざるは勇無きなり」という遺志が、今も全職員の心に確実に息づいていることを実感いたしました。このコロナ禍への対応は、佐々木俊治医師の的確な指揮をもって、現在へと繋がっております。

現在、当法人はさらなる将来を見据えた新たな体制を構築しています。2025年1月には、谷崎潤一郎氏の代表作『細雪』にもゆかりのある、長い歴史を有する勝呂クリニックを迎えました。さらに同年4月には、前神戸市立医療センター中央市民病院副院長の猪熊哲朗先生を院長として招聘いたしました。猪熊院長という優れた指導者のもと、病院は今、力強い牽引力をもって次なるステージへと進んでいます。私も管理者として、その歩みを全力で支えていく所存です。

超高齢社会の進展を見据え、当院ではこれまで歯科口腔外科・耳鼻咽喉科・眼科を新たに整備し、包括的な医療体制を整えてまいりました。整形外科領域では、脊椎疾患に対し、背部に約1cmの小さな創を2か所設けるだけで済む最新の「UBE(脊椎内視鏡手術)」を導入し、患者さんの身体的負担を大幅に軽減しています。

本年4月からは、泌尿器科診療をより一層拡充させるとともに、婦人科においては女性医師による「女性泌尿器疾患」に対応できる診療体制を整えます。これにより、より多くのニーズに対応してまいります。さらに本年秋には、手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」の稼働を開始する予定です。これにより、より精緻で低侵襲な手術を地域の皆様に提供することが可能となります。

本年も当院には高い志を持った医療人が集い、最先端の知見と技術をもって地域の皆様の健康を守り続けてまいります。病氣や怪我は時を選んでくれません。社会医療法人渡邊高記念会 西宮渡辺病院は、これからも地域の医療・介護を守るため、粛々と歩みを進めてまいります。

これまでの60年で培った信頼を礎に、次の半世紀、さらには100年先を見据え、地域の皆様には選ばれ続ける病院であり続けるよう尽力してまいります。今後とも変わらぬご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

令和8年1月吉日

西宮渡辺病院 管理者 佐々木 健陽

## 西宮渡辺病院 院長挨拶

昨年、西宮渡辺病院は、開院60周年を迎えることができました。

日頃より、病院運営・診療にご協力いただいております皆様に、心より感謝申し上げます。

私自身は、佐々木健陽先生(現 西宮渡辺病院管理者)のあとをつぎ、2025年4月より、院長として勤務しております。前任の、神戸市立医療センター中央市民病院では、消化器内科部長として18年間にわたり消化器疾患の急性期医療に従事して参りました。副院長としては、医療情報システム・診療情報・病床管理・業務経営を担当しました。西宮渡辺病院とは、消化器内視鏡検査をお手伝いすることがあり、そのご縁で勤務することになりました。

「敬天愛人～命を敬い人を愛する医療の実践」を病院の理念として、西宮市室川町に開院した本院は、急性期一般病床108床、HCU8床、地域包括医療病床24床、回復期リハビリテーション病床40床を有し、急性期からリハビリ・回復期まで切れ目ない医療を提供してまいりました。昨年から今年にかけて、救急・急性期医療体制を更に充実するため、HCUの増床・手術室の増室をはかり、HCU16床、急性期一般病床150床に回復期リハビリテーション病床を加え、計190床の体制となる予定です。

当院の大きな柱である整形外科については、大腿骨頸部骨折などの外傷外科、変形性膝関節症などの関節外科、脊柱管狭窄症などの脊椎外科、肩関節外科など各領域の専門医を擁し、緊急手術から内視鏡手術まで幅広くカバーしています。

令和5年に増築した新棟でスタートした耳鼻科・眼科・歯科口腔外科の診療も軌道にのり、泌尿器科・婦人科を加えて、より多くの疾患・病態に対応できるようになりました。

私が専門とする消化器内視鏡の領域では、近年、診断・治療とも目覚ましい進歩が見られています。令和5年の新棟開設にあわせて3階に新設された当院「内視鏡センター」の特徴は、最新型の内視鏡システムを導入し、鎮静剤を使用し苦痛の少ない検査を受けていただけることです。検査中は、患者さんは寝ていることが多く、ほとんどの方が、苦痛は感じなかったとおっしゃいます。検査後は、リカバリーベッドにて休んでいただき、鎮静剤の効果が切れてから帰宅していただきます。検査件数も増加傾向にあり、昨年は上部1,400件・下部500件を超えました。

本年には、兵庫県の民間病院では初となる手術用ロボット(da Vinci 5)を導入し、外科・泌尿器科・婦人科領域において、患者に優しい低侵襲的手術を推進して参ります。

また、昨年1月からは、肛門科として100年近い歴史をもつ勝呂クリニックが、当法人の一員に加わりました。中高年で悩まれる方が少なくない痔の専門施設として、勝呂元彦院長の下で手術も含めた治療を継続していただいております。

2026年4月より当院の診療に加わっていただく医師は、以下の方たちです。

- ・泌尿器科 重坂光二 医師
- ・消化器外科 伊藤一真 医師
- ・消化器内科 谷村知紀 医師
- ・整形外科 川端悠暉 医師、田中和幸 医師、寺元皓太郎 医師、大木一生 医師
- ・リウマチ・膠原病科 北野貴之 医師
- ・耳鼻咽喉科 松代直樹 医師
- ・婦人科 柏原宏美 医師
- ・眼科 岩橋佳子 医師
- ・皮膚科 岡昌弘 医師
- ・麻酔科 志村優佳 医師

今後、日本全体において超高齢化社会を迎えて、地域に密着した医療・介護はますます重要となります。当法人内の西宮渡辺心臓脳・血管センター、西宮渡辺脳卒中・心臓リハビリテーション病院、老健施設などの介護部門とも密接に連携することで、これからも地域の皆様の命と健康を守るという使命を果たしてまいり所存です。

本年も、ご指導のほど宜しくお願い申し上げます。

西宮渡辺病院 院長 猪熊 哲朗

# 西宮渡辺病院 年報に寄せて

リウマチ・膠原病科顧問 佐野 統

## 抱負

2021年9月から、毎週木曜日に午前、午後のリウマチ・膠原病外来を担当しています。兵庫医科大学リウマチ・膠原病内科の初代教授、日本リウマチ学会近畿支部代表理事として、阪神地区のリウマチ診療のレベルアップに力を入れて参りました。西宮渡辺病院は、兵庫医科大学の重要な連携病院の一つであります。多数の医局員が当院のリウマチ診療を担当して参りました。

阪神地区には、リウマチ専門医が常勤し、信頼できる病院が非常に少ないです。当院には最新の医療設備が揃っており、リウマチ性疾患の画像診断や迅速な診断が可能です。リウマチ・膠原病センター長の船内正憲(前近畿大学教授)先生のご専門は膠原病やその合併症(肺高血圧など)の最新治療のベテラン医師です。孫瑛洙先生、辻良平先生、重坂実先生などリウマチ専門医がリウマチ膠原病の外来診療を毎日しており、入院治療も安心して受けられます。

最近、高齢のリウマチ患者さんが急増しております。当院の近くにお住いの患者さんにとって当院の役割はたいへん重要です。関節痛や不明熱などの患者さんに適切な診断と最適な高度治療を提供して参りたいと存じます。

## 来年度の目標

リウマチ性疾患の治療目標は寛解から治癒(ドラッグフリー)、生命予後の改善へと変化しています。それは多くの生物学的製剤、JAK阻害薬、合併症の治療薬や予防薬の出現によるものです。膠原病にはそれぞれ診断や診療ガイドラインが作成されており、数年ごと(関節リウマチは3年ごとに改訂)に更新されています。当院ではすべての膠原病の最新の治療が受けられます。合併症や副作用への早期対応も可能です。難病指定医による特定疾患の手続きも積極的に行っています。阪神地区のリウマチ・膠原病患者さんが安心して最善の医療を受けられるよう、院内の整備(綺麗な外来)も充実しています。関節リウマチ、全身性エリテマトーデス、強皮症、多発性筋炎、ANCA関連血管炎、リウマチ性多発筋痛症、シェーグレン症候群、原因不明の関節痛などの患者さんが外来・入院で適切な治療を安心して受けて頂けるよう努力したいと思います。

## 計画

リウマチ・膠原病センターの外来・病棟施設は大変綺麗になりました。整形外科の診察室が隣接しているので、機能の分担が出来ています。また、積極的に病診連携を行い、地域に密着した診療を行っており、実際紹介患者数・逆紹介患者数は飛躍的に増えています。患者さんへの勉強会や地域の先生方との研究会や症例検討会も積極的に行っています。

## 略歴

1971年(昭和46年)：京都府立鴨沂高校 卒業  
 1978年(昭和53年)：京都府立医科大学 卒業  
 1978年(昭和53年)：京都大学医学部附属病院内科 研修医  
 1979年(昭和54年)：国家公務員共済組合連合会 新香里病院内科 医員  
 1985年(昭和60年)：京都大学大学院医学研究科博士課程修了  
 1987年(昭和62年)：京都府立医科大学第一内科 助手  
 1988年(昭和63年)：米国立衛生研究所(NIH)リウマチ部門へ留学  
 1991年(平成3年)：医療法人社団石鏡会 京都田辺中央病院内科 医長  
 1992年(平成4年)：京都府立医科大学第一内科 助手  
 1994年(平成6年)：同上 講師  
 2002年(平成14年)：兵庫医科大学 リウマチ・膠原病科 主任教授  
 2018年(平成30年)：兵庫医科大学名誉教授  
 2018年(平成30年)：社会医療法人岡本病院 京都岡本記念病院 院長  
 2019年(令和元年)：京都府立医科大学 臨床教授  
 2020年(令和2年)：社会医療法人 行岡医学研究会 行岡病院内科顧問  
 2021年(令和3年)：西宮渡辺病院 リウマチ・膠原病科顧問  
 医療法人仁会 武田総合病院 リウマチセンター長  
 一現在に至る

## 受賞歴

1996年：京都府立医科大学 第6回青蓮賞  
 1999年：日本リウマチ財団 三浦記念リウマチ学術研究賞  
 2002年：日本リウマチ財団 北陸製薬 骨・関節疾患臨床医学賞  
 2002年：京都大学臨床病態医科学 特別賞  
 2006年：大阪難病研究財団 特別賞  
 2013年：日本リウマチ学会 学会賞  
 2019年：日本シェーグレン症候群学会 功労賞 など多数

## 所属学会と役職・専門医

日本リウマチ学会(名誉会員、元理事、専門医、指導医)  
 日本リウマチ学会近畿支部(元支部長、前評議員、第23回学術集会 会長)  
 日本内科学会(会員、元評議員、認定医、指導医)  
 日本内科学会近畿地方会(評議員、第207回地方会 会長)  
 日本シェーグレン症候群学会(名誉会員、元理事、第22回学術集会 会長)  
 日本炎症・再生医学会(名誉会員、元理事、第38回学会会長)  
 日本臨床免疫学会(名誉会員、元理事、第43回 総会長)  
 日本脊椎関節炎学会(会員、元理事、第24回学術集会 会長)  
 日本インターフェロン・サイトカイン学会(会員、前幹事、第84回学術集会 総会長)  
 日本臨床リウマチ学会(功労会員、元評議員)  
 米国リウマチ学会(International member)  
 米国癌学会(Active member)  
 ニューヨーク科学アカデミー(会員)

(佐野 統)

# 西宮渡辺病院 年報に寄せて

消化器外科顧問 池田 正孝

2025年の活動報告ならびに2026年の目標をご報告申し上げます。

2025年4月からはこれまで在籍しておりました松原孝明医師に加え、住井敦彦医師、大谷雅樹医師の4名体制で診療にあたってきました。また、今年度からは勝呂クリニックの勝呂元彦先生も当院で痔疾患の手術を行っていただいております。

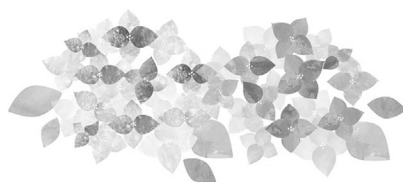
消化器外科の手術日は火曜日と木曜日で痔疾患手術は水曜日に行っております。昨年に引き続き、消化器関連疾患(胆石症、急性虫垂炎、鼠径ヘルニア、胃がん、大腸がん)の手術を積極的に行いました。お陰様で338例の全身麻酔腰椎手術、85例の局所麻酔手術を行い、総手術数423例の手術を行うことができました。その中で大腸癌手術45例(原発巣切除3例)、胃癌6例の悪性腫瘍に対する手術も施行しております。全例、術後の大きな合併症もなく経過されております。また、緊急手術も積極的に行っており、61例の緊急手術を行いました。週1例以上の緊急手術を行っていることとなります。

また、本年度はいよいよ当院にも手術支援装置、いわゆるロボット支援手術システムであるdaVinci 5が導入されます。daVinci 5はIntuitive社の最新のロボットで、2014年に発表された前モデルXiに対してさらに進化したものです。Xiでも十分に優れた器械でありましたが、それに加えて、これまでロボットでは無かった触覚(force feedback)があり、より安全に手術を遂行することが可能となりました。また、最新のカメラシステム、エネルギーデバイス、画像解析技術などが搭載され患者様に優しくまた医者にも優しいシステムとなっています。

今後もさらに消化器内科・兵庫医科大学との連携をとり、昨年度以上に悪性疾患の手術の増加を目標としていきます。また、地域医療においては、悪性疾患だけでなく良性疾患に対する外科治療も重要です。そのためすべての疾患に対して、体に優しい低侵襲手術を積極的に行っていく方針を今後も継続してまいります。

2026年度も地域に根ざした質の高い医療の提供を目指してまいります。今後ともご指導・ご協力よろしくお願い申し上げます。

(兵庫医科大学 下部消化管外科 主任教授 池田 正孝)



## 西宮渡辺病院 年報に寄せて

整形外科顧問 肩関節外来 今井 晋二

肩関節外来を担当しております今井晋二です。

肩関節外来は開始してからまる3年を迎えました。一昨年と比較した昨年の結果を報告いたします。

新患外来患者は42名から65名に増加しました。肩関節外来は完全予約制ですので紹介もしくは自ら予約を取られた患者さんになります。現在、予約待ちがだいたいひと月から1月半になりますのでそろそろ週1回の外来では限界に近づいているように思います。

再診患者は450名から965名に増加しました。肩関節術後患者は他の四肢の関節に比べて、術後リハビリの経過が長くなりがちで、そのためリハビリの再診患者がこのように多くなっています。手術の数に依存しますのでこれは現在の外来日数でも、もう少し増える可能性があります。

人工肩関節置換術は5例から6例です。これはやはり人工関節ですので現在行っている土曜日の手術では少し、心配があるため限界があるように思います。

MRI実施件数が37から82に増加しました。これは新患患者に依存します。新患患者受入数に限界がありますのでそろそろ限界に近いところかと思えます。肩CT検査は7例から12例に増加しています。肩関節でCTを取る場合は人工関節置換術のための検査になるのでこちらもそろそろ限界に近いところと思えます。

肩関節エコー検査は72例から120例に増加しました。エコー検査は関節鏡視下腱板修復術の数に依存します。こちらはもう少し増やすことが可能かと思えます。

肩リハビリテーションは334件から682件に増加しました。これも腱板修復術数に依存します。

最後に関節鏡視下腱板修復術ですが7例から11例に増加しました。人工関節と合わせると17例になります。土曜日の手術ですから、ほぼ月に1.5例の手術があることになっています。こちらはもう少し増加の伸びしろがあります。

2026年には再生医療を腱板不全断裂例に導入しようと思っています。2026年もよろしく願いいたします。

(滋賀医科大学 整形外科学講座 教授 今井 晋二)



# 西宮渡辺病院 年報に寄せて

糖尿病内科顧問 小山 英則

私を含めて、主に本院(一時期は西宮渡辺心臓脳・血管センター)で糖尿病・内分泌外来をほぼ毎日担当させていただいています。2024年度からは常勤医として角田 拓(元 兵庫医科大学助教)が赴任し、手術前後の糖尿病管理を含めてより安全な周術期管理で貢献させていただいています。

糖尿病に関連して、最近では肥満症の新規治療薬が次々と上市され、代謝異常における体重管理の重要性が再度見直されてきています。昨年10月に主催させていただきました肥満学会・肥満症治療学会の学術集会においても、多くの新しい知見が発表され、この分野の盛り上がりを感じています。現在、肥満症治療薬の処方のためには厳しい施設基準を満たすことが必要ですが、大学病院の肥満症センターに多くの患者が紹介されていることを考慮すると、本院でも実施できるように検討してもよいかもしれません。これらの地域のニーズを適切にとらえ、糖尿病診療の1つの拠点となるよう努力していきたいと思えます。

兵庫医科大学 副学長  
社学連携・研究推進センター センター長  
糖尿病内分泌・免疫内科学講座 主任教授  
小山 英則

